

本邦珞瑯鐵器工業の發達

杉村 盛一*

I. 明治時代 (搖籃期)

珞瑯鐵器が市場製品として世に紹介されたのは今より百餘年前十八世紀の初めであつて斯業は主に獨逸に於て發達を見た。尤も此の以前十七世紀の初期既に其の研究は達したのであるから實用化するのに約百年間の年月を要したのである。我國に於ても明治初年特志家の手に依り初めて研究され製品も市販に供せられる様になつたが製品の種類も少く品質も頗る不完全な上價格も相當高價であり且亦當時は陶磁器の全盛を極めた時代であつた爲め新販路の開拓には種々な困難に伴ひ容易に需要の増加を見る事は出来なかつた。併し前の製品は新奇なるものとして相當世の注目を引いたものである。其の後日清、日露の兩戰役を経るに従ひ内地需要も漸次増加し製造所も逐年建設されると共に製造様式等も先進國の範を取り入れる様になり斯業は大いに面目を一新するに至つた。されど販路は依然として殆ど内地に限られると云ふ有様であつた。明治末期に於ける生産額が漸く100萬圓程度に過ぎなかつた事を想へば、當時斯業の狀勢が如何様のものであつたかが看取できる。併し兎に角斯業も多年幾多の試練を経て漸く前の搖籃時代を蟬脱する迄に發達を見たのである。

II. 大正時代 (輸出工業に轉換)

此の如くどうやら獨り歩きも出来様と云ふ大正時代に入るや同3年には突如として歐洲大戰が勃發し從來歐洲製品の獨占市場の感があつた支那、南洋、印度等が歐洲貿易の杜絶と共に一舉に前の供給を本邦に需むる様になつた。之が爲め斯業は急激なる膨脹を遂げ所謂黄金時代を現出したのである。當時は如何なる製品でも輸出に向けられると云ふ状態である。而も尙彼等の要求には應じきれない有様であつたので粗製濫造の弊が追々と顯著となつて來た。之が爲め大正6年農商務省は輸出珞瑯鐵器検査法を制定して其の弊の矯正に備えると共に、製品の改善に努めた。

開戦當初大正3年に於ける生産額は僅かに130萬圓に過ぎなかつたが、翌4年には264萬圓となり2倍の増加を

示し更に5年、6年と躍進を續け戦争終焉の大正7年には841萬圓の巨額に達した。之を同3年に比較するに實に6倍半の激増である。生産の膨脹と共に輸出も亦驚異的の伸長を示して居る。開戦當初の輸出額は頗る僅少で貿易統計にも記載されない有様であつた。併し戦争の進むにつれ歐洲品の代用的需要旺盛となり輸出も逐年多きを加ふる様になつたので同6年より初めて貿易統計に特掲される事となつた。同年の統計は輸出額270萬圓を記載して居る。更に翌7年には376萬圓に向上し戦時の賑盛を物語つて居る。斯の如くして斯業は歐洲大戰に依り内地工業より急轉して輸出工業としての素地を養成し得たのである。此事實は斯業に其の將來性を價值付けたもので大いに注目に値する所である。戦後に於ける斯業は前の旺盛なる進展性を以て一路邁進し生産も1,000萬圓を突破し輸出も5,600萬圓に上り頗る好調の觀があつたが偶々大正9年のパニクに際會し一打撃を蒙り剩へ海外市場に於ては舊市場挽回に積極的となつて來た歐洲製品との角逐漸く其の度を加ふるに至り且亦各地には日貨排斥が勃發し著しく斯業の進展を梗塞するといふ有様で實に内外の事情は悉く不利を極め市價は急下向を呈し業界は頗る悪化した。此の結果は直ちに大正10年の業績に反映し生産は前年の7割輸出は漸く其の半額を支ふると云ふ慘狀を呈した。業者は此苦境に處し生産に輸出に必死の努力を盡し一意其の挽回に努めた。此結果業績も漸く改善せられ大正末期には生産1,000萬圓、輸出700萬圓に迄達した。斯くして斯業は大正の十數年好況に進み不況に戻り着々と其の使命の發達に邁進し遂に輸出工業としての地歩を確保するに至つた。

III. 昭和時代 (忍苦より榮光へ)

1) 統制へ 大正が昭和と改元されると共に斯業は輸出産業として赫々たる希望を擔つて其の初歩を踏み出したのである。然し四圍の狀勢はまだ幸するに至らず一年と不利を加へ其の將來に一大暗影を投ずるに至つた。當時世界的經濟的不況は益々其の深刻味を加へると共に國內には昭和2年に於けるパニクに引續き同5年には金輸出解禁の事あり本邦産業は極度の不振に陥るといふ有様で斯

* 商工省工務局

業も此渦中に於て未曾有の苦境に投ぜられるに至つた。由來斯業には工業、輸出の兩組合存し業界發展の素地を形成して居たのであるが、其の聯繫未だ充分ならざるに稀有の不況に際會したので施すに策なしと云ふ有様で益々生産販賣に統制を缺き粗製濫造に流れ投賣、賣崩し等續出し全く拾收し難い状態を招致した。此結果各工場共經濟状態は甚しく悪化し、休業工場等も漸次増加し、然も其の大部分は減産に依つて辛じて工場の維持を計るといふ暗澹たる有様となり斯業の危機を孕むに立至つた。此處に於て業者は其の對策として統制強化の必要を痛感し其の達成の早からん事を翹望するに至つた。この聲は斯業の中心地である關西に於て先づ揚げられたのである。之が實現の爲め幾度か協議は重ねられた。併し事業者の死活に關する重要問題である爲め議容易に纏らず。反つて益々業界の混亂を増大する結果となつた。併し斯業の甦生は現状を以てしては到底不可能で合理化を置いて他に方法なしといふ事に決し遂に昭和6年3月商工省に斯業改善委員會を設置し斯業對策の樹立速進方に就き陳情するに至つた。此結果同委員會は當業者を主なる委員として直ちに設置され1ヶ月に涉り委員會を開催する事數回、遂に危機に瀕した斯業の挽回方策を決定したのである。次に其の要綱を摘記する事にする。

- 1) 琺瑯鐵器の實情に鑑み差當り關西に於ける輸出琺瑯鐵器に付生産分野の決定及需給の調節を実施すること
- 2) 統制機關は近畿琺瑯鐵器工業組合とすること(筆者註、同組合は其の後地區を擴張し西邦琺瑯鐵器工業組合と改稱す)
- 3) 生産分野の決定、生産の割當、統制に關する費用及其他統制に必要な重要事項の決定を爲す爲め組合内に商議員會を置くこと
- 4) 組合員にして統制要綱に違反したる場合は違約金處分として金1,000圓以下の過怠金及除名其他の制裁を課すること

以上決定と同時に琺瑯鐵器の主要原料である鐵板に付ても次の希望決議を爲したのである。

原料鐵板に關し希望決議

日本黒鉄共販組合の施行に係る犠牲輸出制度を琺瑯鐵器製造業者にも均霑し得る様政府に於て斡旋せられ度
 敝上の諸決定に基いて組合は直ちに諸準備の整調に努め
 斯業の劃期的事業は業界注視の裏に同年7月15日より實

施せらるるに至つた。この統制案に因り組合員は自己の生産すべき品種が決定され且毎月組合より割當られた數量の範圍内に於て製造する事になつたのである。組合員は斯業挽回の意氣に燃へ一致團結能く本事業の圓滿な遂行に努力した。業績は着々として豫期の成果を收め、之が爲め從來動搖常なかつた業界も漸く安定の域に向ひ商取引も圓滑となり生産も好調を呈する様になつた。特に統制實施直後即9月下旬突發した英國金本位停止に依る磅爲替の下落に依り海外市場の狀態が甚しく不利に傾き斯業は不利の打撃を蒙つたのであるが、組合員は能く忍び難きを忍び専心統制の確保に努め混亂を阻止し本事業の効果を如實に示した如きは實に本事業當初の試練として特筆すべきものであらう。斯の如く統制を中心に斯業の甦生に一路邁進の意氣を示した斯業は同年12月より實施された金輸出再禁止に因る圓爲替の落凋に恵まれ輸出條件が頗る有利に轉回した爲め外國品との競争にも餘力を生じ新販路の開拓も大いに容易となり、更に亦南洋等に於ける排日も漸く終焉に近づいた爲め、輸出は急速の發展を遂げ昭和9年には實に800萬圓の巨額に達し記録的の盛況を齎した。

斯業は甦生した。輸出工業として危殆に瀕した斯業は、統制てう適時安打に依り退勢を一舉に挽回し昔時の隆昌を摩する榮光を獲得したのである。國家の爲め誠に慶賀に堪へない次第である。想へば歐洲大戰を契機として勃興、一躍輸出産業の班に列した斯業。幾多の苦難、苦闘を嘗め盡し漸く確固不拔の基礎を築き得たる斯業、過去20年間の感や如何に。

然れども赫々たる復興を見たる斯業に活躍する工業者諸卿よ。世界の大勢は一瞬の安逸さへ諸君に許さない。諸君には尙なすべき事の多くが残されて居る。諸君の護れる統制既約を徒に温床化する事なく、諸君の翳せる爲替條件を唯一の武器と頼む事なく、弛緩せず停滯せず、國家産業確立の爲め、諸君の榮譽の爲め一層の奮起を望んで止まないものである。

2) 統制の效果 吾人は叙上統制の經過を略記した。次に其の效果の一端を述べる事にする。

イ、不良なる新規業者の續出を防止し得る 從來輸出が好勢を呈すると、必ず新企業者が續出し、而も此種の業者は動もすると、原料、材料代、工賃等の不拂ひを行ひ不當な販賣戦に出で、業界を混亂に導くのみでなく、海外市場に對しては本邦品市價の不安を抱かしめ輸出衰退の一因を

爲したものであるが、統制實施後は組合員の協力に依り完全に之を防ぎ得た。

ロ、製造者は自己の生産に對し安定を得 生産統制の結果業者は相互的に安定した且必ず賣れるべき割當を以て生産に當る爲め内面的經營が一定の方針の許に立つに至つた。

ハ、製品市價の安定を得 生産統制に依り過剰生産の惧を除去する事が出来た爲め一定の採算の許に販賣價格が維持される様になり商取引は頗る圓滑を來した。

ニ、販賣の安定及増進をもたらす 製品市價の安定及商人の安心に依り販賣上の競争が緩和された結果進で新市場開拓に努力する傾向を馴致し輸出増進に資する事が出来た。

ホ、生産者の信用向上 統制の結果採算有利に轉回した爲め金融或は原材料買入等に對し外部的信用著しく向上するに至つた。

ヘ、製品々質の向上を來す 販賣競争が著しく緩和された爲め生産者は極力品質の改善に努力する様になつた。

ト、取引の變化を來す 從來の取引方法は主として製造者と中間商人との間に行はれたものであり且彼等は製造業者に對し一面金融機關の觀もあり相當の勢力を有して居たのであるが、統制の確立後は、生産者は經營内容に安定を得たる爲め其の餘力を以て販賣方法の改善に努むる事になり此結果直接阪神在住の外國商館に、或は海外商人に直接販賣するといふ傾向が顯著となり、以て中間利益の省略を見るに至つた。尤もこの變化は、不況當時生産者が中間商人の倒産或は思惑等に依て甚しい打撃を蒙つた事に基く所が大で業者は將來其の轍を踏まざらんとする對策として此の傾向を大いに助長した事は否み難い所である。この事情は第1表に依り明である。

3) 統制前後に於ける取引率の變化

第1表

	統制前	統制後
中間商人を経たるもの	80%	30%
商館直賣のもの	15	50
海外直輸出のもの	5	20

以上の様な取引の變化に依り生産者は海外事情にも精通する様になり、従て其等の狀勢に順應して生産の改善に努力する事が出来る事となつた。之等は近時斯業の大なる收穫とも稱する事が出来る。

4) 斯業の現況 吾人は斯業發達の經過を略述した。本

項に於て斯業の現況を尙少しく詳細に述べ且本協會設立當初即 20 年前の斯業の事情に比較考慮する事にしやう。

イ、生産狀況 斯業の主要生産地は、東京及關西である。此の事情は今も昔も變りがない。此外に九州地方にも數ヶ所の製造所がある。而して東京は内地を、關西は輸出を目標として製造に従事して居る。前者には東京瑛瑛鐵器工業組合が東京府を地區として存して居り、後者には關西瑛瑛鐵器工業組合が、新潟、長野、静岡以西、2府31縣といふ龐大なる區域を地區として有し、更に兩組合の聯繫機關として、日本瑛瑛鐵器工業組合聯合會があり、大いに業界の改善發展に寄與して居る。組合は斯く東西兩地に分立して居るが東京地方の生産額は頗る僅少で最近の狀勢では總生産額の約1割を占むる程度で内地需要の一部を満するに過ぎない。之を以て見ても斯業の中心が關西に存する事が明瞭である。

最近に於ける斯業は頗る繁榮に向ひ、生産も顯著な膨脹を遂げ昭和9年に於ては約1,600~1,700萬圓と推定される。之を大正4年に比較するに、6倍に當る。隔世の感なきを得ない。次に過去20ヶ年間の生産價額を示し斯業の消長を窺ふことにしやう。

第2表

年次	生産價額 (單位圓)	年次	生産價額 (單位圓)
大正4年	2,640,000	大正14年	9,920,000
5年	4,320,000	15年	9,030,000
6年	5,140,000	昭和元年	7,100,000
7年	8,410,000	2年	8,810,000
8年	10,400,000	3年	8,620,000
9年	10,730,000	4年	6,540,000
10年	7,770,000	5年	5,340,000
11年	8,720,000	6年	8,700,000
12年	9,780,000	7年	13,000,000 (推定)
13年	8,660,000	8年	17,000,000 ()

生産品中主なるものは、洗面器、皿、瓶及鍋等であつて其等の産額は總額の約7割を占めて居る。

斯業は所謂中小工業に屬するもので、之に投下された資本は、大約7-800萬圓と推定される。而して其の工場數は約70であるから、一工場の平均投資額は10萬圓程度で、20數萬圓の生産を擧げて居る事になる。従て最も大なる工場でも其の資本は100萬圓を出せず、小なるものにありては、1萬圓にも満たないといふ有様である。斯く小規模經營が容易である爲め、其の多數は個人企業に屬するものである。株式會社中主なるものを掲ぐれば次の如くである。

第3表

會社名	所在地	公稱資本金 円	拂込資本金 円
伊藤珉瑯株式會社	大阪	1,000,000	1,000,000
三重珉瑯株式會社	三重	700,000	700,000
東亞エナメル株式會社	兵庫	1,000,000	500,000
日本エナメル株式會社	大阪	400,000	400,000
大阪珉瑯株式會社	〃	500,000	350,000
博多鐵器エナメル株式會社	福岡	370,000	370,000
株式會社淀川珉瑯製造所	大阪	200,000	100,000

口、輸出狀況 叙上の如く、本邦珉瑯鐵器の輸出は、世界大戰を契機とし、發達を見たるものであつて、當時歐洲貿易の杜絶に因り從來歐洲品の獨占市場の感があつた。支那、南洋等に於て、本邦品に對し代用的需要を喚起するに至つた事が斯業が輸出工業に轉換する端緒である。業者は一度捕へた好機を巧に利用し其の市場確保に有ゆる犠牲と努力を惜まなかつた。戦後歐洲品の進出に依る激烈なる競争にも能く拮抗した。絶えざる排日貨の苦難にも能く健闘した。此の間或は工業組合を設立し業者の團結を計り、或は統制強化の確立に依り業態の安定を計り、製品の改善、生産費の低下に意を用ひ、極力内容の整備充實に努めた。昭和6年に於ける未曾有の大不況に直面しても能く之を突破し得たのも全く之等の賜である。斯くして金輸出再禁止以後、斯業は内外幾多の好條件を武器として獨歩の勢を以て各市場を席捲し、南洋、印度は勿論遠くアフリカをも其の手中に收め、着々競争品を驅逐し能く市場の確保に努めた。(第4表参照) 昭和9年800萬圓といふ未曾有の業績を挙げ得たのも故ある所である。20年前當時生産僅かに二百數十萬圓に過ぎず漸く内地需要に其の運命を托して居た時代に比し實に隔世の觀なき能はずである。此輸出額を本品が漸く貿易統計に特掲される様になつた大正6年に於ける輸出額270萬圓に對比するに3倍餘に當る。之は斯業現在の繁榮に比し稍過小の感があるが、現在の價格が當時に比し約1/3に低下して居る事を思へば斯業活躍の跡を充分窺ふ事が出来る。次に其の経過を掲ぐる事にしやう。

第4表

年次	輸出額 円	年次	輸出額 円
大正6年	2,700,000	大正15年	5,970,000
7年	3,770,000	昭和元年	5,930,000
8年	5,330,000	2年	5,930,000
9年	6,340,000	3年	6,440,000
10年	3,240,000	4年	6,710,000
11年	4,190,000	5年	4,040,000
12年	4,540,000	6年	2,700,000
13年	5,620,000	7年	4,110,000
14年	6,910,000	8年	7,220,000
		9年	8,050,000

仕向地の主なるものは、蘭領印度、英領印度及アフリカ

第5表 蘭領印度に於ける珉瑯鐵器國別輸入額

仕出國	單位 1,000盾				
	昭和8年	昭和7年	昭和6年	昭和5年	昭和4年
日本	1,160 (81.17%)	865 (68.92%)	768 (57.19%)	1,201 (53.50%)	2,440 (53.07%)
和蘭	82 (5.74%)	126 (10.04%)	218 (16.23%)	404 (18.00%)	693 (15.07%)
英國	— (—%)	3 (0.24%)	— (—%)	2 (0.09%)	13 (0.28%)
獨逸	69 (4.83%)	134 (10.68%)	200 (14.89%)	372 (16.57%)	1,016 (22.10%)
白耳義	23 (1.61%)	55 (4.38%)	49 (3.65%)	56 (2.49%)	135 (2.94%)
彼南	1 (0.07%)	5 (0.40%)	8 (0.60%)	22 (0.98%)	23 (0.50%)
新嘉坡	88 (6.16%)	60 (4.78%)	96 (7.15%)	183 (8.15%)	221 (4.81%)
チエツコ スロバキヤ	— (—%)	1 (0.08%)	1 (0.07%)	2 (0.09%)	13 (0.28%)
支那	6 (0.42%)	6 (0.48%)	3 (0.22%)	3 (0.13%)	42 (0.91%)
瑞西	— (—%)	— (—%)	— (—%)	— (—%)	1 (0.02%)
瑞典	— (—%)	— (—%)	— (—%)	— (—%)	1 (0.02%)
計	1,429 (100%)	1,255 (100%)	1,343 (100%)	2,245 (100%)	4,598 (100%)

(第5表参照)であつて、往年主位を占めた支那に對し頗る衰微を示して居るのは注目せられる所であるが、此は多年に亘る排日貨に災せられたのと又昭和5年以來同地に斯業が勃興した事に因るものである。併し將來排日の緩和に伴ひ同地向輸出は相當好望視される。之に反し滿洲向輸出は最近益々激増し有力なる市場となつて居る。第6表に依り這般の消息を推測する事が出来る。

第6表 阪神兩港輸出額

仕向地	昭和9年 円	昭和8年 円	昭和7年 円	昭和6年 円	昭和5年 円
蘭領印度	1,467,000	1,361,000	847,000	489,000	618,000
英領印度	756,000	1,410,000	1,182,000	557,000	787,000
アフリカ	1,060,000	852,000	267,000	180,000	193,000
海峽殖民地	990,000	699,000	211,000	170,000	267,000
シアム	615,000	507,000	321,000	204,000	307,000
滿洲(北支を含む)	464,000	623,000	194,000	71,000	168,000
中支那	61,000	49,000	68,000	30,000	85,000
南支那	106,000	54,000	11,000	168,000	254,000
其の他	874,000	682,000	444,000	352,000	417,000
計	6,393,000	6,237,000	3,549,000	2,221,000	3,096,000

ハ、市價の變遷 市價は原材料價格の消長に左右される事は勿論であるが、一方時代の需給關係に支配される事が著しい。珉瑯鐵器工業が過去22年間幾多の浮沈、消長を辿り且其の主要原料である鐵板の價格が過去に於て顯著な變化を示したので、珉瑯鐵器の市價も常にこの諸事情に

追従せざるを得なかつた。試に 30cm 無地洗面器 (本品は 珽瑯鐵器の標準品である) に就き其の市價の變遷を觀察する事にする。大正 6 年同品 1 打の市價は 4.30 圓であつた鐵板は當時頗る不足を來し大暴騰を演じた結果 1t (30, # 3'×6') 900 圓近くにもなつた。生産及輸出は夫々 515 萬圓、270 萬圓を示して居る。然るに其の後大戰終結と共に鐵板は遞落歩調を辿り同 9 年には、670 圓に低下した。之に反し洗面器は、5.50 圓に昇騰し最高記録を示して居る。以上は同年に於て生産、輸出共頻に伸長し夫々 1,073 萬圓及 634 萬圓の巨額に達する盛況を呈せるに基因するものである。然し斯業が世界的不況に當面し年々萎縮症狀を呈するや、市價も從つて益々下向の度を強め、昭和 6 年には遂に最底に陥り 1.03 圓を唱へ採算狀況は頗る惡化するに至つた。當年鐵板も 147 圓といふ慘狀を呈して居る。生産、輸出の梗塞其の極に達したる事は前述の通りである。この市價は大正 6 年の 1/4 以下であり、同 9 年の 1/5 にも當つて居ない。併し斯業が所有困難を克服し同年には 1.74 を轉期として再び繁榮を取戻すと共に市價も亦上昇し 8 年

圓、9 年には 1.52 圓 となり採算は相當有利に轉回するに至つた。一方鐵板も此間軍需工業等の勃興に因り 171 圓、217 圓と騰勢を持続して居る。但し此の如く輸出が激増し且鐵板の騰貴を見たるに拘らず本品市價が 9 年に於て低落を示したのは、統制地域外であり且製品検査の制度もない朝鮮に於て珽瑯工業が興り輸出を行ふに至つた事に因るものと思料せられる。次に市價を掲げ其の變遷の經過を示すことにする。

第 7 表

年次	30 cm 無地洗面器 (1 打) 円	30 番 3'×6' 鐵板 (1t) 円	年次	30 cm 無地洗面器 (1 打) 円	30 番 3'×6' 鐵板 (1t) 円
大正 5 年	277	463	大正 15 年	221	281
6 年	432	892	昭和元年	170	260
7 年	442	938	2 年	155	198
8 年	475	844	3 年	133	187
9 年	550	670	4 年	119	190
10 年	382	460	5 年	103	147
11 年	312	320	6 年	136	144
12 年	244	361	7 年	174	171
13 年	250	324	8 年	152	217
14 年	259	321	9 年		